
当院における結腸憩室症の臨床的検証

菊池志乃*、玉田 尚、池田宗弘、濱田達雄、松島勇介、
成田基良、山中雄介、神田直樹

(高槻赤十字病院消化器内科)

食生活の欧米化や高齢化により結腸憩室症は近年増加しており、それに伴い合併症である憩室出血に臨床上遭遇する機会も増えてきているにも関わらず、結腸憩室症の発生機序もいまだ解明されていない。また、憩室出血は下部消化管出血の原因としては17-40%と比較的高い頻度を示しているにも関わらず、その診断および治療については明確なガイドラインが定められていない。特に出血に関しては出血点の同定は15-85%と非常に施設間格差が大きく、当院でも26%程度の同定率に留まっている。早期内視鏡検査および止血処置は活動性出血の止血、再出血の予防により輸血と外科手術の回避率を上げ、入院期間を短縮するとされており、出血症例に対する明確な戦略は今後より一層必要になると考えられる。

このため、今回我々は2013年1月～2013年12月までの一年間に当院で行った下部消化管内視鏡検査1751回の内、結腸憩室と診断した392例(同一人物での対象期間内の検査は除く)および憩室出血と診断し入院加療を行なった18名19症例について当院における結腸憩室症および出血症例の臨床的特徴や診断について文献的考察を加え、検討を行った。